

響きが良いだけの言葉に惑わされるな

< 1 > 襟を正す

昭和 30 年代・40 年代に霞ヶ関や永田町が絡んだ汚職や疑獄事件が多発した。歴代の総理大臣や関係大臣は、ロ々にこう弁明した。「襟を正して前向きに対処する」と。そして数年経つとまた似たような出来事が発生する。そして、また同じ発言で締めくくる。何ら対策は打たれてはいないので、再発は目に見えている。近頃は汚職ほどの高度な犯罪よりも、迂闊な発言がきっかけとなる「舌禍事件」が目立って来た。そして今年も又、いくつかの不祥事が報道されている。襟元を正してばかりいる政治家の着物の襟は、手垢で汚れているに違いない。

< 2 > 三点セット

これと似たようなことが民間企業でもかなり発生している。不祥事を起こした企業は、記者会見で見せ場を作る。「数人で並んで深々と頭を下げて謝罪」「第三者委員会を立ち上げて徹底的に究明を行う」「再発防止策をとる」の三点セットになっていることが多い。中には社長が落涙して見せるような見せ場を作っているものまである。そして、それから半年後、同じ業界の別の会社がまた問題を起こし、同じ儀式を繰り返すのだが、時々同じ企業が、別の問題を起こして同じ弁明をしていることさえある。それにしても、企業が犯す不祥事としての許容範囲を遙かに越えているような、悪意のある悪質な不祥事が目立って来たのは恐ろしきことと思わねばならない。

< 3 > 最重要課題

「北朝鮮に拉致された人を帰還させる」という課題が公式に認識され、政府が動き出してからもう 20 年の歳月が流れた。内閣総理大臣小泉純一郎が彼の地に踏み込み、何人かの被害者を連れて帰ってきた。「残りの被害者も救出してくれ」という強い要望が出てくるのは当然のことで、この要望は日を追う毎に増大してきた。そして、以降の内閣は「拉致問題担当大臣」というポストを設けた上に、「拉致問題の解決は本内閣の最重要課題」と旗を揚げた。しかしながら、その実態は「最重要課題」という認識にはほど遠かった。北朝鮮に踏み込んだ首相は一人もいないばかりか、直接交渉に挑んだ閣僚もいなかった。何かのついでに「アメリカの大統領にお願い」に行ってくる程度のアクションでは、最重要課題への対処策とは言えない。それでもまだ「拉致問題の解決は本内閣の最重要課題」と、響きの良い言葉を語り続ける。実態としては何もしないし、する気があるのかもわからないまま時だけが流れる。そして被害者家族の方が一人二人と天寿を全うされるようになってきた。

< 4 > 復旧と復興

時々大きな地震や台風などの自然災害が発生して、想像を絶する被害をもたらすことが多くなった。東北地方の津波被害を中心に大きな爪痕が残り、さらに原子力発電所が並ぶ福島県では、放射能の影響から一部の住民が居住することもできなくなってしまった。「ここには住むことはできません。直ちに転居しなさい」と言われて生まれ育った土地を離れることになった人々の苦しみは計り知れない。「東北の復興なくして真の復興はありえない」と叫ぶ政治家とマスコミ。

やがて三陸の鉄道が復旧した、道路が開通した、町が再生したと報じられるようになったが、常磐線が開通したのはごく最近の出来事に過ぎない。挙げ句の果てが、新しいサッカー場設立やそれに伴う新駅開業ばかりが注目を浴びる（ように騒ぎ立てる）。

未だに自分の家に戻ることもできない人々を尻目に「福島復興なくして復興はない」と響きの良い言葉が今日も空虚に空を舞う。

< 5 > 寄り添う

沖縄が米国統治から離れて日本に返還された年からもう半世紀が流れた。テレビや新聞は沖縄にスポットライトをあてて様々な番組を制作している。

返還が決定した時の総理大臣は「沖縄の返還なくして戦後の終りはない」とぶち上げた。

そして折ある度に、多くの閣僚達は「沖縄県民に寄り添う政策」と語り続けた。

その後の50年の足取りについて語るのは専門家の皆さんにお任せするが……。

近頃のニュース報道を見ていると「寄り添う」という言葉が、沖縄問題に限らず様々な場面で使われるようになってきた。よくよく見ていると、「気にしているよ、心配するな」と言っているだけで具体的には誰も寄り添いもしないし、さしたる対処もされないことが多いような気がする。

しかし冷静に考えてみれば、「沖縄返還なくして……」とぶちあげた総理大臣はその後、

アメリカの核の傘の下に身を置きながら、「非核三原則」なる言葉をぶち上げた。そしてその言葉だけが評価の対象となり、ノーベル平和賞を手中にした。

「表に現われている言葉や出来事だけに惑わされず、事の心髄を見極めよ」と教えてくれた先生がいたことを思い出した。

以上